

授業研究



問題の提起・体育科

《他者》を楽しみ続ける児童の

育成を目指した体育科の授業づくり

——音楽的リズムを取り入れた器械運動の授業——

広島大学附属小学校教諭

河野 吉信



指導案や写真などの資料がご覧いただけます。ぜひご利用ください。

1 はじめに

近年、子供たちを取り巻く環境の変化から「運動の二極化」が進み、運動に対して積極的な子と運動に対して消極的な子が存在している。多様性という観点から言えば、運動が好きとか嫌いというのは、尊重されるべきことなのかもしれない。体育科の学習においては、運動ができる、できないというのは、授業の中の子供たちの姿として現れてしまうものである。どの子も運動を楽しみたい、できるようになりたいと思い、一生懸命に取り組むのだが、できないという状況のまま終わってしまう子

も少なくはない。できる子にとっては楽しい、できない子にとっては楽しくないという感情を抱かせるような授業の中での子どもの二極化で終わらせないためにも、教師はどの子にもできることを目指し授業の在り方を考えている。しかし、ただやみくもに練習を繰り返すだけの授業では、運動の二極化はこれまでに以上に進んでいくだろう。運動ができる、できないで終わるのはなく、自己の運動の状況を認識し、学びの個性化を図りつつ、他者から情報を得たり、他者に情報を与えたりする協働的な学びをどう実現するかを考えることは体育科の授業を構築する上で、とても大切なことである。そのような

点からも、本校で行っている「《他者》を楽しみ続ける」という研究は、体育科の授業づくりにおいても大切であると考ええる。

2 主題設定の理由

本校体育部では《他者》を二点設定している。坂田(2023)は、一点目を、「学習で習得を目指す運動像を《他者》」としてとらえている。運動が習熟していく過程は、自分の外側にある技術を自分の内側の技能として獲得していく過程があると言える。」と述べ、二点目を「共同で学習を行う仲間としての《他者》である。」と述べている。

体育科の学習において、子供たちはそれまで経験の無い技などの動きや、行ったことの無いゲームについて、「やってみたい」という思いから意欲的に取り組もうとする。やってみるとできてしまうこともあれば、やってもできないこともある。学習で扱うお手本となる運動像を提示することで、「あんな風に回ってみたい」「あの動きをチームで再現したい」という《他者》(現在の自分にはない姿)が立ち上がると考える。また、運動ができるようになる過程では、自分の動きを認識して、理想と

する運動像へと近づけていく行為が必要であると考えられる。まだ技や運動ができていない時、理想とする運動像と実際の自分の動きは一致しておらず、「ずれ」が生じていることが多くある。これらのずれを埋めるために、試行錯誤を繰り返すのだが、例えば、前転ができないからと言って、ただやみくもに前転の練習をするだけでは、できるようになるために相当の時間を要するだろう。四十五分という授業の中で、いかに自分にとって必要な情報を獲得できるかが大切である。そのためには、周りで見ている友達が自分の動きを見て情報を与えてくれることが、できるようになるための近道であると考えられる。そのような行為を行う中で、与えられる動きや感覚自体も《他者》であり、それを取り入れながら、変わろうとする過程での自分の姿自体も《他者》であると言える。

3 副主題の設定について

——リズムを取り入れるとは——

昨年度、本校の研究テーマは、「カリキュラムの連動」であった。今回、実践として考えたのが音楽科との連動である。音楽科の学習指導要領解説には、中学年の目標と内容、A表現の楽器の活動イ(イ)音やフレーズのつ